



No.214

ティーブレイク

Tea Break

ティーブレイクの歴史

会員 高石 健二*

『ティーブレイク』のもともとの意味は、仕事の合間に手を休めてお茶を飲んでくつろぐことである。主に英国で用いられ、英国紳士が仕事の合間に紅茶を楽しんでいる姿が想像できる。本誌における『ティーブレイク』は1~2頁程度のコラムのことであり、知財に関する骨太の解説や考察等の合間に、読者がほっと頭を休めて軽く読める「くつろぎ」を提供している。その内容は、日常のちょっとしたことや、趣味や豆知識、時事ネタ、日本弁理士会での活動の様子など多岐にわたっている。今回は、通巻900号の節目ということもあって、本誌において一時の休息を与えてくれる『ティーブレイク』の歴史について振り返ってみようと思う。

『ティーブレイク』が最初に本誌に登場したのは、1996年4月号である。タイトルは「若さ」。ちょうど弁理士でもある菅直人厚生大臣が薬害エイズ被害者に謝罪するというニュースがあったので、その件を挙げて、仕事を通じて、常に物事に敏感で「若さ」を保っていたいと文を締めている。驚いたことに、最初は会誌委員しか『ティーブレイク』の投稿ができなかった。『ティーブレイク』の末尾には、「会誌委員になると大変だという噂もあるやに聞きます。そんなこともないと思いたいところですが、何か役得(?)があってもよいのではないかと、投稿資格を会誌委員に限定させていただいた(ご免なさい!)新しいコラム(ティー・ブレイク)の誕生です。どうぞよろしく。」と記載している。『ティーブレイク』が会誌委員の役得から始まったことは何とも面白い。

『ティーブレイク』はしばらく会誌委員会が毎月執筆を行っていたが、2007年1月号の第121回から投稿者の氏名が明記され、おそらくその当たりから会員であれば誰でも投稿できるようになった。その当時の投稿頻度は年に3~4本程度であったが、会員の皆様の協力もあって最近では年に6~10本程度掲載できている。

本誌では、連載記事の投稿は認められていないが、『ティーブレイク』は過去に連載記事がいくつかある。そのうちのひとつが「座敷童子」である。なんと「座敷わらし(その3)」までである。2004年2月号及び3月号の「座敷童子」及び「座敷童子(その2)」では、座敷童子が出るという噂の東北の旅館を取り上げており、筆者は座敷童子に会うために実際に泊まりに行っている。2004年9月号の「座敷わらし(その3)」では、座敷童子が出るという東北の旅館に行ってから、6ヶ月の間に3件もの顧客が増えて実際に御利益(ごりやく)があったという話をしている。よほど衝撃的だったのだろうか、以前取り上げた話題のその後を載せているのは興味深い。

『ティーブレイク』のコーナー名は、最初は単に太字で中点有りの「ティー・ブレイク」と書いてあるだけであった。2000年以降から「ティー・ブレイク」の左に紅茶(コーヒー?)の絵が載るようになって、「ティー・ブレイク」の文字も弧状に配置されて柔らかい印象になった。2004年8月号の第99回から現在のスタイルに近くなって、筆記体の「Tea Break」とティーブレイクの様子を表す写真が載るようになった。もしかしたら第100回を記念して『ティーブレイク』のリニューアルを考えていたのかもしれないが、なぜか第99回からの変更になっている。ちなみに、第100回記念の『ティーブレイク』は、上述した「座敷わらし(その3)」である。

* 令和4年度広報センター会誌編集部部長

ティー・ブレイク



ティー・ブレイク

*Tea Break*

歴代のパテント誌の目次を眺めていると、タイトルをただで興味をわいてくる『ティーブレイク』がたくさんある。その中のほんの一部を少し紹介してみようと思う。

1996年8月号の「時の錯覚」(第5回)は、年を取るとともに時間が過ぎるのが早く感じるという、よくある題材をテーマにしているのだが、「音、光などの物理的刺激量が等比的に増すとき、人間の間隔は等差的に増す」というウェーバー・フェッティナーの法則を持ち出して、物理的刺激量を「月日の隔たり」と置き換え、歳とともに時間が早くたつと錯覚することについての理論式を導出している。単なる感想に留まらず、現象に対する理論構築を試みているのが興味深い。

1997年2月号の「弁理士横丁」(第11回)は、タイトルだけ見ても何の話か分からなかったが、住宅街の小道を挟んで筆者を含めた3人の弁理士が全くの偶然で住んでいたことがあるという話である。今よりも登録者数が少ない時代に奇跡のような出来事ではあるが、今ではなかなか載ることのない内容の記事である。

2003年12月号の「洗濯機の中の幸せ」(第92回)では、筆者自身が片付けるのが苦手なことについて、「自然法則(エントロピー増大の法則)に逆らうのはよそう。かりにも発明に関わる職に就いているのだから。」と表現している。どのように「使用前」と「使用后」とを識別するのか、一日着たくらいで衣服への付着物は微量であって、洗濯など非効率的な行為などと小難しい不満をこぼしながらも、洗濯機の中のぐるぐる回る水流で私の大きなTシャツとあの人の小さなTシャツとが仲良さそうに絡み合っているのを見ると心の奥がほんのり暖かくなると、小さな楽しみを見出している。

2021年7月号の「現代のシュリーマン」(第201回)は、タイトルから内容に興味を惹かれる。シュリーマンと言えば事業で儲けてから、トロイ遺跡の発掘という“夢”の事業を実現させた人物であり、研究・開発には“モノづくり”と同じように“カネづくり”が大切であり、弁理士はこれらのバランスをうまくとりながら、上手く繋いでいくべきと結んでいる。

このように、『ティーブレイク』は、読者にくつろぎを提供しながらも、知的好奇心を刺激するタイトルや、読了後の満足度の高い内容を兼ね備えており、パテント誌にこれからも必要なものであると感じる。